

第 32 回 淀川管内河川レンジャー代表者会議 議事要旨

日 時： 令和 6 年 12 月 1 日（日） 9:00～15:30

場 所： 中央流域センター

出席者： 委員 中川、久保田、河合、光田、伊藤、居原田、道場、南良、杉本、瀬戸口、酒井、杉浦、橋本、安藤、金森、谷川
淀川河川事務所 辻野、南部
河川レンジャー事務局 成宮、深澤、宝藤、服部

（敬称略）

1. 議事

<審議>

令和 5 年度淀川管内河川レンジャー点検結果とりまとめ

<報告>

河川レンジャーの辞任について

指導員制度について

淀川かわづくりパートナー登録と活動予定

<プレゼンテーション>

新規河川レンジャーのプレゼンテーション

<審査>

新規河川レンジャーの再任審査

2. 結果

<審議>

- 令和 5 年度淀川管内河川レンジャー点検結果とりまとめ（案）が承認された。

<審査>

（1）新規河川レンジャーの審査（非公開）

- 審査の結果、以下の 7 名を河川レンジャーに任命することが決定された。
- 河川レンジャー任命者に対しては、試行期間における留意点をとりまとめ、審査結果とあわせて通知する。留意点は、審査等で得られた委員の意見をもとに、事務局でとりまとめ、中川会長に確認いただくものとする。

3. 主な意見等

（1）令和 5 年度淀川管内河川レンジャー点検結果とりまとめ

- 令和 6 年度淀川水系流域委員会（11 月 29 日開催）の進捗点検結果の説明資料において、河川レンジャーの活動が 6 つの分野別にまとめられている。ただし、分類名は「川づくり・人づくり」ではなく、「ネットワーク作り」という名称になっている。進捗点検とは異なる名称にしているのは、何か意図があるのか。進捗点検と統一した分類で点検してはどうか。淀川水系河川整備計画の進捗点検と整合性をとり、点検を行う必要があるのではないか。

⇒川と人とのつながりの点検指標には、活動回数があり、河川レンジャーの活動回数が計上されている。本件は河川レンジャー活動の点検であり、活動回数の内訳を貢献分野ごとに示しており、合計の活動回数は進捗点検と整合している。

- 河川レンジャー専門家会議では活動分野の考え方が議論となった。なかでも「川づくり・人づくり」については、河川レンジャーの活動の目的であり、最終的に到達する分野であることを考えると、同列に記載することには違和感がある。
- 「川づくり・人づくり」分野に該当する活動が何かを理解されていないだけで、実際に行っている河川レンジャーがいるのではないか。様々な活動事例を示す等の工夫をし、レンジャーの理解を進める必要がある。
- 河川事業への貢献度は、経年的に取り組みが少ない状況である。今後、代表者会議において、原因を分析し改善策を考えるための材料として、具体的にどのような意見やニーズが抽出されているのか、どのような取り組みがされているのか、資料を見てわかるようにしてほしい。

⇒参考資料 2 令和 5 年度淀川管内河川レンジャー点検結果とりまとめ(案)には、住民意見の聴取やニーズの抽出を行った活動事例を掲載している。活動において、意見交換やアンケートにより、住民意見を聴取し、活動の改善や河川管理者へフィードバックしている活動がある。

- 参加者にアンケートを配付し、その結果を整理して抽出した意見をもとに活動を改善したところまでを資料で見える化してはどうか。

(2) 指導員制度について

- 鳥飼ワンドの活動では、「鳥飼ワンドを保全する活動」「舟運の活性化を行う活動」「摂津市と連携した川づくりを推進する活動」の 3 つがあり、複数の分野で指導が必要となったことから、複数名の指導員を募集した。資料 9 指導員制度についての 2 ページ「指導員制度の基本事項(案)」では、1 活動に 1 名を原則とするとあるが、1 分野につき 1 名にしてはどうか。

⇒指導員制度については試行段階であり、意見をふまえ、今後、試行しながら検討を進めていく。

- 指導員制度の適用は第一期だけなのか。

⇒現段階では、試行期間以外のすべてのレンジャー活動に適用する。

- 河川レンジャーが指導を希望した場合も指導を受けることはできるか。

⇒原則、対象となる活動は、レンジャー事務局と河川事務所で選定するが、希望があった場合は柔軟に対応する。

(3) 淀川かわづくりパートナー登録と活動予定

- 淀川かわづくりパートナーが活発に活動しているのか、問題がないか等、現在の状況を知りたいので、パートナーからの意見等も紹介してほしい。
- 活動に複数回協力しているパートナーいる一方、まったく活動していないパートナーもいる。せつかく登録しているので、年間 1 回は活動するよう働きかけては

どうか。

⇒パートナー制度の趣旨は、河川レンジャーほどの負担はなく、気軽にボランティアできるというところにある。パートナー通信として提供する情報を読んでもらうことや、自主的に活動協力いただくといった現行の運用方法が適していると考えます。

- 活動されているパートナーには、感謝状を渡してはどうか。また、腕章、登録カード等を発行することで、活動のモチベーションが上がるのではないかと。

以上